

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	石川 喜堂
論文題目	ペルシア語文化圏における「神への愛」 ーテキストマイニングを用いたアッタールのスーフィー詩の分析ー		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、ペルシア語文化圏を対象に、現代のイラン・イスラーム共和国北東部にあたるホラーサーン地方で活躍した12世紀の詩人、ファリードウッディーン・アッタール(1221年頃没)のスーフィー詩を、テキストマイニングの手法を用いて分析するものである。定量的な分析によって、既存の研究の結論に対し量的な客観性を与え、定性的な分析のみでは明らかにされてこなかったアッタールのテキストの新たな読みを提供する。さらに、ペルシア語を対象としたテキストマイニング用のソフトウェアを開発し、今後のペルシア語を用いた研究の発展に貢献することを目指している。本論文は第1章から第6章までの本文と序論・結論から成る。</p> <p>序論は、本論文の主題および基本方針を提示したうえで、解明すべき具体的な課題を提起する。</p> <p>第1章では、アッタールの先行研究を、思想、テキストの構造、受容史、象徴、刊本や写本の信頼性の5点に分類して整理し、さらに従来の文献学と異なる文学理論の手法がどのように用いられてきたか論じる。そのうえで、これらの先行研究が質的な分析に偏っており、量的な分析が十分になされてこなかったことを指摘する。</p> <p>第2章では、ペルシア語文化圏におけるアッタールの位置づけを明確にする。スーフィズムとペルシア詩が、この文化圏の発展に寄与した二大要素である。アッタールが、スーフィーが持っていた神秘主義思想を韻文詩によって表現するというペルシア神秘主義詩の伝統の中にいること、「神への愛」がアッタールのみならず、スーフィーにとって重要なテーマであることを明らかにする。</p> <p>第3章では、分析対象のテキスト、解析の目的、本論文で使うテキストマイニング手法の概要を説明する。テキストマイニングについては、特徴を抽出できる主成分分析、主成分分析の欠点をカバーする階層的クラスタ分析、単語同士が文章や段落単位で同時に生じる傾向を可視化する共起ネットワーク、単語の使用頻度を可視化するWord Cloudを用いることを説明し、以降の章の具体的な分析手順を示す。</p> <p>第4章では、アッタールのテキストを対象に、単語の頻度分析、特徴的な章や各章の単語の使用方法の分析、「神への愛」とそれに伴う苦痛に関する単語の各テキストに対する分析、真作と偽作の分類を行う。このことにより、定性的にしか行われてこなかったアッタールの真作と偽作の判断及び偽作間での特徴の差異を頻度分析、主成分分析、階層的クラスタ分析により定量的に評価する。</p>			

第5章では、アッタール以外の詩人のテキストを対象に第4章と同様の手法で分析を行い、アッタールのテキストと比較する。アッタールとサナーイーとルーミーのテキストは共通の伝統に属しつつ、「理性(‘aql)」に異なる役割を与えていることを示すとともに、彼らと異なる伝統に属する詩人をも検討し、愛と苦痛の関係について表現する方法がペルシア詩全般に共通してあったことを示唆する。

第6章では、第4章と第5章の分析結果から、1. アッタールと、サナーイーおよびルーミーの著作の類似点と相違点、2. アッタールのテキストと、アンヴァリーおよびハーカーニーの著作との類似点と相違点、3. アッタールの真作と偽作の類似点と相違点、4. アッタールの作品間における類似点と相違点、の4点について考察する。真作と偽作に対する分析では、アッタールの偽作とされているテキストが定量的にも偽作である蓋然性が高いことを明らかにする。最後に、先行研究では明らかにされてこなかったアッタールの真作とされるテキスト間における「神への愛」とそれに伴う苦痛の表現の差異を指摘する。

結論では、本研究で示した定量的な分析のアプローチがアッタールのテキスト研究や他のペルシア詩人との比較研究に対して有意な結果を残し、ペルシア語の形態素解析ツールがペルシア語を用いた研究の発展に寄与すると総括している。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、代表的なペルシア神秘主義詩人ファリードウッディーン・アッターール(1221年頃没)の著作を、テキストマイニングという手法を用いて、定量的に分析するものである。従来の定性的分析を十分にふまえたうえで、可視化された形で、ペルシア詩集の伝統のなかに見つけうる類似点・相違点を説得的に明示することに成功している。

第1章では、先行研究を整理したうえで、本論文は量的分析を行うことを述べる。第2章は、ペルシア神秘主義詩の伝統とそのなかのアッターールの位置づけについて論じる。この部分は、伝統的なアッターール研究に忠実に基づいたものである。これに対して第3章は、テキストマイニングという新たな手法について説明する。具体的には、主成分分析、階層的クラスター分析、共起ネットワーク、Word Cloudという4つの分析手法が明らかにされる。これを合計13点のペルシア詩集の分析に実地に応用するのが、第4～5章である。これを受けて、ペルシア詩の伝統における愛の表現方法を、定量的に広く考察するのが第6章である。

本論文の学術的な意義は、下記の3点に要約される。

第一に、神秘主義文学研究の分野にコンピュータ科学の知見を応用し、斬新な研究を成し遂げたことが挙げられる。従来ペルシア詩には、イスラーム神秘主義の思想的分析と、恋愛詩の流れのなか位置づける文学的分析がなされてきたが、いずれも人文科学の手法のみに基づいていた。本論文は、それらの成果を咀嚼したうえで、テキストマイニングというコンピュータ科学の手法を用いた点に大きな功績がある。一方で古典ペルシア語を読みこなし、他方で最新のコンピュータ技術を用いて分析することは、きわめて困難な作業である。本論文はこれに果敢に挑戦し、すぐれた成果を挙げている。

第二は、人文科学的アプローチに関する功績である。本論文は、アッターールという詩人を取り上げるが、真作とされてきたもの・偽作とされてきたもの合わせて9点の彼の著作に加えて、同じ神秘主義詩の伝統に属するサナーイー(1134年没)、ルーミー(1273年没)に加えて、別のペルシア詩の伝統に属するアンヴァリー(1187年没)、ハーカーニー(1199年頃没)の著作をも博搜する。本論文は、アッターールという一人の詩人を主たる対象としたものであるが、彼のテキストの分析のみにとどまることなく、大きくペルシア詩全体のなかにおいて、愛を苦痛や悲しみで表す伝統があることを示したところに、すぐれた点がある。ペルシア語・ペルシア文学についての十分な鍛錬の成果をそこに見ることができる。

これに対して第三は、テキストマイニングの手法の可能性を広げた功績である。本論文の分析と並行して申請者は、ペルシア語を対象としたテキストマイニング用のソフトウェアを開発している(共同開発者がいるため、本論文本体には含めていないが、本年12月に公開予定である)。これは、今後のペルシア語を用いた研究の発展に貢献するこ

とがおおいに期待されるものである。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和5年6月30日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。